

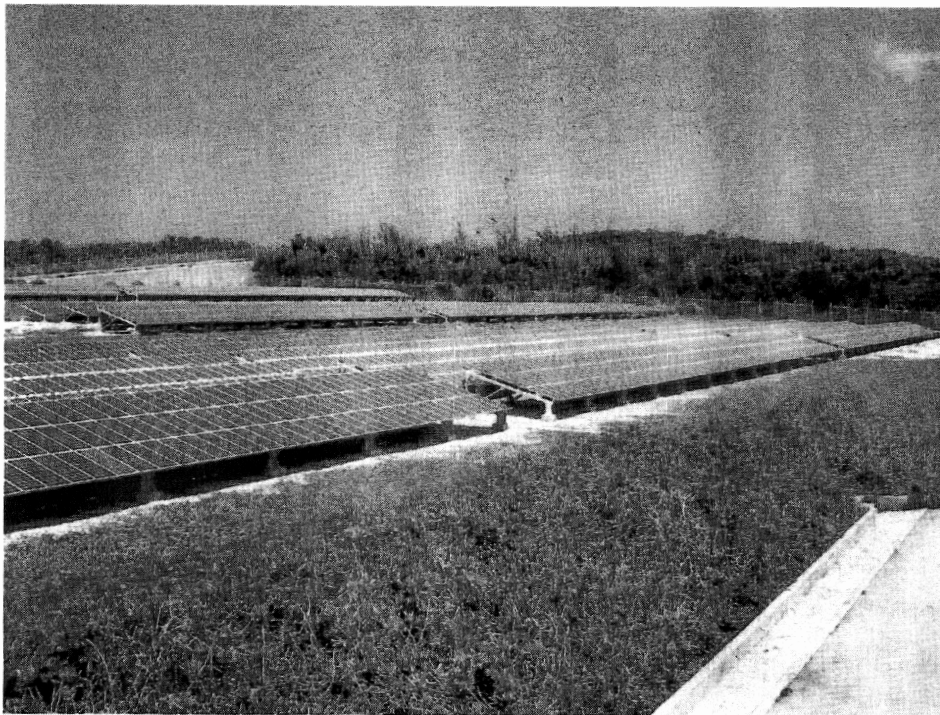
# 琉球大学学術リポジトリ

## 新聞関連記事

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター<br>公開日: 2012-02-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: -<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/23009">http://hdl.handle.net/20.500.12000/23009</a>              |

# Workshop On Newspaper

## 新聞関連記事



2005年8月19日(金) 琉球新報

世界島嶼会議沖繩プレ会議

来月1日(木) 琉球新報本社2階ホール

2日(金) アトールエメラルド宮古島

琉球新報社は琉球大学アジア太平洋島嶼研究センターと世界島嶼会議沖繩プレ会議を9月1、2日の両日開催します。2006年7月から8月にかけて米国ハワイのマウイ島で開催される第9回世界島嶼会議に向けたものです。公開シンポジウムでは島々のグローバルなネットワークの在り方を、世界各国の研究者がさまざまな視点から議論し、連携強化に向けた問題点と方策を探ります。入場は無料。

〔琉球新報本社(那覇市天久)2階多目的ホール会場〕9月1日(木)午後2-5時

パネリスト

グラント・マッコール氏(国際島嶼学会会長)

トロイ・マクグレース氏(マーシャルアイランド大学長)

パトリック・テレイ氏(パラオコミュニティ大学長)

ヘレン・J・D・ウィピー氏(グアム大上級副学長)

ブルース・ベスト氏(グアム大研究員)

ロバート・ナカソネ氏(ハワイ東西文化センター・沖繩プログラムディレクター)

コーディネーター 嘉数 啓(琉大副学長)

〔ホテル・アトールエメラルド宮古島会場〕2日(金)午後2-5時

基調講演 グラント・マッコール氏(国際島嶼学会会長)

〔主催〕琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター

〔共催〕琉球新報社、平良市、笹川太平洋島嶼国基金、国際島嶼学会、国際島嶼科学評議会、日本島嶼学会、ハワイ東西文化センター

〔事務局〕琉大アジア太平洋島嶼研究センター ☎098(895)8272

平良市役所総務企画室 ☎0980(72)4878

2005年8月29日(月) 琉球新報

## 世界島嶼会議 沖縄プレ会議への誘い 上 嘉数 啓 主要議題は「開発と自然」 島のネットワーク化も課題

昨年台湾の金門島で開催された第8回世界島嶼会議・第5回国際島嶼学会の合同会議で、次回の会議を「島嶼—その持続可能戦略を探る」のテーマで、来年の7月29日～8月3日に、ハワイのマウイ島で開催することが決定された。マウイ郡と宮古平良市とは「姉妹都市関係」にあることから、マウイ島での本会議につなぐために、沖縄本島か宮古島で「プレ世界島嶼会議」を開催することも決定された。

1986年にカナダバンクーバー島で始まった世界島嶼会議は、94年の沖縄会議から、当地で旗揚げした「国際島嶼学会」と一体になって開催されるようになった。それ以来、日本唯一の島嶼県である沖縄の地は「Nissology=島嶼学」の発祥の地として広く世界に知られるようになった。地域、分野をまたいで、ゆるやかに組織化されている国際島嶼学会は、世界各地で断片的に行われてきた島嶼研究の「共通のプラットフォーム(議論の場)」となり、回を重ねるごとに拡大・深化してきている。

尖閣諸島や竹島などの国境に位地する島々が新たな国際紛争の舞台になりかねない今日、世界の頭脳が一堂に集まって地球規模の問題を討議するスイスの「世界経済フォーラム=ダボス会議」にならって、島嶼問題を討議する「世界島嶼フォーラム」を、これを機に沖縄に常設できればと願っている。

これまで、島嶼会議で一貫して議論されてきた島嶼共通の主要テーマが2つある。1つは、「島の持続可能性」で、島の自然環境と生活の維持・発展をどう調和させるかという難しい課題と、2つは沖縄会議のテーマでもあった島嶼間の連携協力・ネットワーク化の課題である。世界に何万島とある有人島はそれぞれに多様な自然・生活・歴史・文化空間を形成しており、これらの課題への取り組みも多種多様であることが、数多くの事例報告で明らかになってきた。

1つの島(地域)で有効なアプローチが条件の異なる他の島(地域)では必ずしも有効でないこともわかってきた。これは当たり前のようだが、経験と情報に乏しい島社会では非常にしばしば、よそ様の物まねをして「具体化の誤謬(失敗)」を繰り返している事例はわれわれの周辺にもゴロゴロしているのではないか。

9月1日～3日に開催される今回のプレ会議には、海外から、台湾、ハワイ、フィジー、ミクロネシア地域から、マーシャル諸島大学、北マリアナ大学、パラオコミュニティ大学、ミクロネシア大学、グアム大学、グアムコミュニティ大学の学長とグラント・マツコール国際島嶼学会会長を含む13名の専門家が参加し、琉球大学での専門家会議を皮切りに、天久の琉球新報本社ホールでの公開シンポジウム、宮古平良市での公開シンポジウム、「ヤシの実大学」の交流会などが予定されている。

琉大、琉球新報会場では、「島嶼社会のグローバルなネットワークと連携協力に向けて—島はインターナショナル」、宮古会場では「生物多様性と『シマンチュ』の暮らし」が討議テーマとなる。新報、宮古会場では逐次通訳が行われるが、専門家会議では英語のみの討議となる。

(琉球大学副学長・国際島嶼科学評議会東アジア太平洋地区代表)

世界島嶼会議沖縄プレ会議（琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市など共催）は、9月1日午後2時から琉球新報本社（那覇市天久）多目的ホール、2日午後2時から、ホテル・アトールエメラルド宮古島（平良市）で公開シンポジウムが開催される（1日午前は琉球大学で専門家会議を開催）。公開シンポは入場無料。問い合わせは琉大アジア太平洋島嶼研究センター☎098（895）8272か、平良市役所総務企画室☎0980（72）4878。

2005年8月30日（火） 琉球新報

## 世界島嶼会議 沖縄プレ会議への誘い 下 大城 肇 知的、人的交流に期待 太平洋地域との連携模索

地理的にも歴史的にも太平洋島嶼地域と沖縄は緊密な関係にある。とりわけ戦前の移民や復帰後の南方基地カツオ漁業などを通して草の根レベルで信頼関係を築いてきた。このような関係にある沖縄と太平洋島嶼地域は、さらなる交流・協力を通して共通の課題や地域固有の課題解決に当たろうという機運が高まっている。

2000年7月と翌01年7月に「太平洋島嶼国知的ワークショップ」（太平洋・学長サミット）が琉球大学で開催された。また、03年5月に万国津梁館で「日本・太平洋諸島フォーラム首脳会議」（太平洋・島サミット）が開催され、「沖縄イニシアティブ＝より豊かで安全な太平洋のための地域開発戦略および共同行動計画」が採択された。

これら一連の会議によって、琉球大学と太平洋島嶼地域との知的・人的交流の促進による将来的課題への積極的な取り組み・貢献が合意されたり、太平洋地域の持続可能な開発に沖縄のイニシアティブで貢献する意思があることが表明されたりして、琉球大学や沖縄県をはじめとする県内主体による太平洋島嶼地域に対する一層の貢献が期待される。

このたび、琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催の国際島嶼ワークショップが3日間の日程で開催される。琉大の島嶼研究センターは、島嶼地域の抱える課題について内外の研究者による学際的・融合的研究を推進する機関として02年3月に設立され、これまで海外の研究者を招いた研究会などを開催してきた。

この国際島嶼ワークショップは2つの内容を持っている。世界島嶼会議のプレ会議とやしの実大としての会議・現地巡検である。ミクロネシア連邦、グアム、北マリアナ、マーシャル諸島、パラオ、フィジー、ハワイ、オーストラリアから学長や研究者を招いて、島嶼地域の抱える諸課題の解決方策と今後の展望について議論してもらう予定である。

世界島嶼会議沖縄プレ会議は、2006年7月にハワイ・マウイ島で開催される第9回会議「島嶼・その持続可能戦略を探る」の前哨となる会議である。やしの実大学は、笹川太平洋島嶼国基金の業務委託による日本の島と太平洋の島々の交流事業であり、多くの日本人に太平洋の島々に興味を持ち理解を深めてもらうことを主旨としている。

島嶼経済の抱える問題は幅広く、深刻な事態に直面しているケースもある。地球環境問題、廃棄物問題、生物多様性の問題、医療・保険問題、人材育成の問題、情報格差の問題、アイデンティティの問題、経済援助の問題、そして持続可能な経済自立の問題がある。

今回の会議では、これらに関連して、島人のくらしと観光のかかわり、観光の生物多様性に与え

る影響、開発における人的資源の重要性、人間開発と教育のありかた、人口と経済成長、島嶼ネットワーク、琉僑＝ウチナーンチュ・ネットワーク等々について具体的な課題解決の方策が話し合われることになる。

同じ島嶼地域としての沖縄が太平洋島嶼地域と交流連携することによって島嶼問題が解決できればたいへんうれしい。沖縄県がめざすアジア・太平洋地域の交流・協力拠点の実現にも貢献できると思う。琉大の島嶼研究センターは、今後も沖縄とアジア・太平洋島嶼地域の研究・経済交流のコーディネーターとしての使命を果たしていくつもりだ。ぜひ、今回のシンポジウムに足を運んでいただき、太平洋島嶼地域と沖縄の連携協力について一緒に考えてみませんか。

(日本島嶼学会常任理事、琉大教授)

世界島嶼会議沖縄プレ会議（琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市など共催）は、9月1日午後2時から琉球新報本社（那覇市天久）多目的ホール、2日午後2時から、ホテル・アトールエメラルド宮古島（平良市）で公開シンポジウムが開催される（1日午前は琉球大学で専門家会議を開催）。公開シンポは入場無料。問い合わせは琉大アジア太平洋島嶼研究センター☎098（895）8272 か、平良市役所総務企画室☎0980（72）4878。

琉球新報 9月1日（木）

宮古宣言まとめたい

国際島嶼学会会長グラント・マッコール氏に聞く

島嶼国の研究者が、島々のグローバルなネットワークの在り方などを話し合う「世界島嶼会議沖縄プレ会議」が1日から始まる。国際島嶼学会のグラント・マッコール会長（オーストラリア・サウス・ウェールズ大学教授）に、会議の意義や期待する成果などを聞いた。

—沖縄でプレ会議を開く目的は。

「われわれ学者の議論は、会議に参加し資料を持ち帰って、そこで終わってしまうことが多い。今回の会議には学者だけでなく、実際に仕事などを通して実践的に活動している人たちにも参加してもらい、さらに彼ら自身のネットワークでも（議論について）話し合ってもらいたい。できればマウイの本会議にも来てほしい。そして沖縄の経験をハワイでも話し合い、マウイの次の開催地である韓国のチェジュで話し合うという具合に、継続した議論につなげていきたい」

—今回の会議の意義は。

「これまで島の外から島嶼の問題を議論してきた。例えるなら、宮古島の社会や経済などの問題を東京やニューヨークやシドニーで話し合ってきたわけだ。今回は宮古島で話し合われる。実際に島に集まることに意味がある。また、ハワイの島々と宮古とは、既にパートナー関係がある。その関係についても深い議論が期待できる」

—どんな成果が期待されるのか。

「1994年に沖縄で世界島嶼会議と国際島嶼学会を開いたときには、島嶼学(ニッソロジー)という新しい学問的な言葉を生み出すことができた。今回も何らかの具体的な成果が期待できるし、地元にとっても有効な成果を出したい」

—沖縄からのアピールを出す予定は。

「もちろん考えなければならない。わたしが特に訴えたいと考えているのは、知識は共有しなければ意味がない、ということだ。ミクロネシア連邦やパラオなど島嶼国の大学の学長が六人も集まる。こんな会議はめったにない。笹川太平洋島嶼国基金の人も参加している。いろいろなところから人が集まるので、地元の人たちともよく話をして、何らかのアピールを宮古宣言としてまとめたい。議論を通して結果を出したいと思っている」

※写真 「宮古宣言をまとめたい」と話す国際島嶼学会のグラント・マッコール会長=31日、那覇市のホテル西武オリオン

琉球新報9月1日(木)夕刊

## 連携強化へ討議

### 世界島嶼プレ会議が開幕 琉大

島嶼国の研究者が、島々の世界的な連携強化に向けてさまざまな視点から論議する「世界島嶼会議沖縄プレ会議」(琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市など共催)が1日午前、西原町の琉球大学50周年記念館での専門家会議を皮切りに始まった。島嶼各国の大学の学長ら二十人の研究者が出席し、島々の連携に向けた問題点と方策を探った。

専門家会議では、琉大の森田孟進学長が「島嶼が抱える共通問題は、互恵的パートナーシップで継続的な取り組みを行う必要がある。シンポジウムの中で、島嶼コミュニティに便益が生み出されるよう期待したい」とあいさつ。嘉数啓琉大副学長が、琉大の成り立ちや沖縄と島嶼地域の交流について説明した。

琉大COE(卓越した研究拠点)リーダーの土屋誠理学部教授が、琉大が取り組むCOEプログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析—アジア太平洋地域における研究教育拠点形成」の概要などを説明。慶應大政策・メディア研究科の鶴野公郎教授は「持続可能な開発のための環境教育」と題して報告した。

午後二時からは、那覇市天久の琉球新報社で「島嶼社会のグローバルなネットワークと連携協力に向けて—島はインターナショナル」と題した公開シンポジウムが開かれる。

沖縄プレ会議は、2006年7月29日から8月3日に米国ハワイのマウイ島で開かれる「第九回世界島嶼会議」に向けて開かれた。二日から平良市に会議を移し、生物多様性に恵まれた島嶼環境の維持と発展を同時並行的に進めるための方法などについて話し合う。

※写真 島々の連携強化について話し合う出席者ら=1日午前9時15分ごろ、西原町の琉球大学50周年記念館

2005年9月3日(土) 琉球新報

## ネットで知識共有を 世界島嶼沖縄会議 平良市で公開シンポ

〔平良〕太平洋の八つの国と地域から、大学の学長など島嶼学研究者らが参加して開かれた「世界島嶼会議沖縄プレ会議」(琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市、笹川太平洋島嶼国基金など共催)は、2日、平良市で公開シンポジウムを開催。インターネットなど最新の技術を使い、伝統的な地域の共有を目指すことや、持続可能な生活の質の向上に向け努力することの重要性などを確認し、二日間の会議を閉幕した。

基調講演した国際島嶼学会のグラント・マッコール会長は「島嶼学はネットワークで成り立ち、みなさんとの協力体制を通して発展する。われわれが持つ知識、知恵は共有しなければ意味がない」と話し、連携の重要性を繰り返し訴えた。

「生物多様性とシマンチュの暮らし」をテーマに行われたパネルディスカッションでは、北マリアナ大のアンソニー・デ・レオン・グエレロ学長、ミクロネシア大のスペンシン・ジェイムス学長、グアム大のハロルド・L・アレン学長、グアムコミュニティー大のヒロミアノ・デロス・サントス学長ら6人が、島嶼地域が置かれている現状を報告。

宮古農林高校の前里和洋教諭は、2004年に「ストックホルム青少年水大賞」を受賞した同校の取り組みを紹介したほか、石垣市史編集委員の石垣博孝氏は「謡に見る生物と島人の暮らし」と題して報告した。コーディネーターは嘉数啓琉大副学長が務めた。

※ 写真 世界島嶼学会のグラント・マッコール会長の基調講演に聞き入る  
平良市民ら＝2日、平良市のホテル・アトールエメラルド宮古島

2005年9月3日(土) 宮古新報(日刊)

## 世界島嶼会議プレ会議 持続的発展へ積極討論 島の将来ともに考えよう 公開シンポ 共通課題解決へ情報交換

世界島嶼(とうしょ)会議プレ大会公開シンポジウム(主催・琉球大学、平良市、同実行委員会)が2日午後、市内のホテルで開かれた。「地域経済発展と環境保全—共生型社会発展のために」をテーマに開催され、基調講演やパネルディスカッションを通して島嶼地域が抱える課題解決に向けて情報や意見を交換した。基調講演ではグラント・マッコール国際島嶼学会会長が「生物多様性とシマンチュの暮らし」と題し講話したほか、パネルディスカッションでは海外から招いた研究者らを含む。パネリスト9人のうち地元を代表して伊志嶺亮市長や県立宮古農林高校の前里和洋教諭が参加し、地下水保全など宮古島市の持続的発展に向けた課題などについて意見を述べた。(8面に関連)

このプレ大会は来年7月から8月にかけて米国ハワイ州マウイ郡で開催される第9回国際島嶼会議に先駆けて行われたもので、1月には那覇市で学術会議と公開シンポジウムが開催された。今回、平良市とマウイ郡が姉妹都市を締結していることから特別に宮古で公開シンポジウムを開催することになった。



今回は 10 月 1 日に誕生する宮古島市の発展に向け環境問題や自立経済、人材育成など島嶼地域が抱える共通課題について海外から招いた研究者らと意見を交わし市民とともに島の将来について考えることを目的としている。

開会式では伊志嶺市長が「島嶼地域は特殊な地域であり海で隔てられた島は独立した世界。島それぞれで固有の自然環境、生態系を持ち、その中で育まれた独自の文化、風土、歴史、伝統文化などがある。島嶼地域が直面している多くの課題、問題解決に向け情報、意見交換し、ともに島の将来について考えたい」と呼びかけた。

共催者を代表し河野善彦笹川太平洋島嶼国基金部長が「太平洋島嶼国八カ国から教育指導者らに來島いただいた。沖縄、ミクロネシア、ポリネシアと地図で島嶼地域を見ていくと国境で分かれていることが不自然に感じられる。シンポジウムでの活発な討議で相互理解が深まり、将来の活動について方向性見出せることができるよう願いたい」とあいさつした。

篠遠善彦やしの実大学長（代読）が「具体的なテーマが設定されて有益な意見交換の場となることを願う。生まれ変わったやしの実大学が来年からも継続されることを願いたい」と述べた。

※ 写真 太平洋島嶼国から招へいされた研究者らが意見を交わしたパネルディスカッション＝ホテルアトールエメラルド宮古島

宮古新報 9月3日（土）日刊

## パネルディスカッション 島嶼地域 発展むけ意見 ネットワーク、協力が鍵

コーディネーター 嘉数 啓氏（琉大理事副学長）

### 基調講演

国際島嶼学会長 グラント・マッコール氏

知恵・知識 共有が大切 国際島嶼学会会長 グラント・マッコール氏

世界島嶼会議プレ大会の基調講演では国際島嶼学会長のグラント・マッコール氏が「生物多様性とシマンチュの暮らし」をテーマに、島嶼地域におけるコミュニケーションや交流、協力を考える島嶼学の重要性について話した。（1面に本記）

マッコール氏は観光産業が島嶼地域において大きな影響を与えるとした上で「島自身の自治権を持って島の資源を有効に活用していくべき」と強調し、「人工の施設を作り、島全体をテーマパークにするようなディズニーランド化や米国人が好む食事を提供するようなマクドナルド化する画一的な状態でいいのかよく考えてほしい」と訴えた。

インターネットの活用について、「情報の海は実際の海にも似ておりバーチャルの世界に漕ぎ出すことは昔の人たちがカヌーで大海に漕ぎ出すのと同様で太陽に出会いサンゴ礁で座礁することもあるということを忘れてはいけない。インターネットは広い海に囲まれた島嶼地域が一つになる有効な方法の一つでもある」と話した。

自ら提言する島嶼学に触れ「島嶼地域にとって大切なことはどんな形でお互いに協力しコミュニケーションを図るかということ」と述べ、「今回を機に島嶼学という概念をよく考えてほしい。それぞれの地域で様々な意見があり食い違うこともあるだろう。島嶼学はネットワークでありそれぞれの協力体制を通してのみ発展するものである。知識や知恵もみんな共有することができなければ力を発揮できず本当の意味をなさない」と強く呼びかけた。

#### ともに働くとき成功ある

グアムコミュニティ大学学長 ヒロミアノ・デロス・サントス氏

島に住むものとして一つであるという共通性を感じることは大切なことでプラスの面。島でのマイナスの面としては種の存続の危機に瀕する動物がいるなど環境問題が挙げられる。島嶼に暮らすものとして年を重ねれば高齢化していく、我々は子々孫々に残せるものを残していかなければいけない。フォード創始者の言葉を借りたい。将来について考える時、覚えておいてほしい「ともに集うときは物事の始まり。集い続けるときは進展がある。ともに働くときそこには成功がある」。

#### ネットワーク不可欠

東西文化センター沖縄ディレクター ボブ・ナカソネ氏

グローバル化が進展する時代に人口の少ない小島嶼が生き残るためには海外とのネットワーク構築は不可欠。離散した少数民族の華僑や印僑、ユダヤに比べてもウチナンチュは最も小さなネットワーク。ユダヤなどは立派なネットワークを構築したが何百年も掛かっている。世界ウチナンチュビジネスアソシエーション(WUB)は世界十五カ国二十一支部にまで拡大した。グローバルネットワークの中で沖縄どこにあるのかと聞かず、今後はウチナンチュはどこにいるのかと聞くようになる。

#### きょうの発表大きな資産

平良市長 伊志嶺 亮氏

それぞれの発表が宮古にとって大きな資産になった。平良市の街づくりのメインテーマは健康。健康都市づくりとして人、街、自然の健康を考えている。課題もたくさんあり自立的経済の確立、自然環境との共生、循環型社会の構築に向け残された課題もあるので地下室を保全し、しっかりと取り組みたい。廃棄物処理も大きな問題で、将来的にはゼロエミッションにも取り組んでいきたい。きょうは多くの共通課題を見出した。島嶼のネットワーク構築が非常に大切だと考える。

#### 島、海洋資源の活用保全を

南太平洋大学教授 ランディ・ターマン氏

持続可能な島の発展、生活の向上を考える上で島の資源と海洋資源の利用を持続的に可能にしないといけない。そこには多様性と応用性が重なってこそ持続可能な発展が可能である。島嶼の持続

可能な発展は、環境の上に穀物などの食品が育ち、人々の生活が成り立っていることを忘れてはいけ  
ない。国連事務総長は世界の発展を考える上で「島々に目を向けないといけない。島の保全がない  
限り世界の発展はない」としている。今、島嶼は世界から関心の目を向けられている。

### 地域の協力体制必要

グアム大学学長 ハロルドL・アレン氏

島の生態系を考えると、かなり変化に弱い一面を持っている。島の生態系を守ることは努力  
が必要とされる。島々の社会生活を守るためには、別の島々の人たちと情報を交換することが重要  
になってくる。教育機関として住んでいる人にとって何が必要であるかを考え、大学同士でネット  
ワークを構築していくことが大切。遠隔学習でなければ全く教育を受けられない人たちもいるかも  
しれない。いろいろ困難な状況が発生してくる中で地域間の協力体制が必要になってくる。

### 島の自然を大切に

石垣市史編集委員 石垣 博孝氏

無人島を考える時、祭りや行事が行われていることが人間が住んでいることと考えたい。八重山  
地方で古くから歌われている歌の中で考えると黒島の「ペンガントウレ」は傑作。歌詞を見ると  
自分の集落の身近な手の届く範囲で食料を調達していることが分かる。踊りもあるので非常にリア  
ルに再現される。最近では自然の動植物に触れる機会が少なくなった。これからはアンパンヌミダ  
ガーマ（自然を歌う）歌は生まれてこないと思う。島の自然を大切にしていきたい。

### 協同・協調が必要

FSM ミクロネシア大学学長 スペンシン・ジェイムス氏

ミクロネシア連邦は四つの地域に分けられる。日本や沖縄から大きな影響を受けてきた。初代大  
統領はナカムラという氏であり、三百の日本語が使われている。例えば自動車などそのまま使用さ  
れている。テクノロジーが発展する中で島嶼地域は互いに与える影響を考えないと存在できない。  
互いに関係性があるということは地球規模であり、これからはネットワークや協同・協調していく  
ことが必要とされる。環境保全、自らの文化を大切にすることを忘れていけないことを強調したい。

### 長期的観点で観光開発を

北マリアナ大学学長 アンソニー・デ・レオン・グエレロ氏

観光開発が経済効果だけだと考える島々の政府に経済的な開発だけが唯一ではないということを知  
らせないといけない。経済効果も重要だが、短期的な利益よりも持続可能で長期的な利益になる  
ことが大切であり、観光客に満足の行くサービスの提供が重要。観光そのものが文化、住民の生活  
に根ざしたものであり、観光開発は環境資源の質の向上、島社会の向上につながるものでなければ  
ならない。総合的に観光開発は地域生活の改善につながるものでなければならぬし、人材育成や

起業のチャンス、経済効果を与えるものでないといけない。島嶼地域における観光開発は長期的な観点から見て取り組むべき。長期的な立場にたって計画を立てていく必要があることを強調したい。

## 命の源 地下水守ろう

宮古農林高校教諭 前里 和洋氏

地下水を守ることは持続的に発展する上で不可欠。島の周りを海に囲まれた島嶼地域では、毎日たくさんのものが移入されてくる。島から移出される量は少なく、残ったものは島に大きな負荷をかけてしまう。将来、持続的な発展を遂げるためには負荷をかけるものを循環するようにしていくことが大きな課題。生徒とともに「命の源である地下水を守ろう」をテーマに有機肥料を研究し、化学肥料の施肥量を減らせるように取り組んできた。地下水を守るためには島人の意識改革も必要。ストックホルムジュニアウォータープライズでは宮古島に負荷を与えるものをうまく循環させる地下水保全の考え方、地域の原料を活用した研究取り組みが地下水を利用する多くの国や地域で応用される可能性が高いことが評価された。受賞したことが、大学のない海に囲まれた小さな島で学問の価値を考え、環境教育への大きな源になってほしい。将来を背負って立つ子ども達に夢を与えることで島の発展に役立つことを願いたい。

2005年9月3日(土) 宮古毎日新聞(日刊)

### 世界島嶼会議沖縄プレ大会

#### 島の島嶼性 再認識

#### 持続的発展の重要性も確認

来年7、8月にハワイ・マウイ島で開催される第9回世界島嶼会議の沖縄プレ大会公開シンポジウム(主催・琉球大学、平良市、同シンポジウム実行委員会)が2日、平良市のホテルで開かれ、太平洋島嶼地域から集まったパネリストらが、それぞれの島の視点で意見を発表、島嶼国、島嶼地域間のネットワークづくりや協調の重要性、持続的発展の重要性を確認した。(10面に関連)

パネリストとして参加した伊志嶺亮市長は「島々の多様性や多くの共通点があることが分かり、宮古にとって大きな示唆になった。自立経済確立、自然環境との共生、循環型社会の構築に向け、地下水を保全しながら、取り組んでいきたい」と述べ、宮古の持続的発展に意気込みを示した。

今回のプレ大会は、昨年台湾の金門島で開催された第8回世界島嶼会議の中で、マウイ島で来年行われる第9回会議を前に、マウイと姉妹都市関係にある平良市でプレ大会を行ってはどうかとの案があり、実現に至った。1月には那覇市内でシンポジウムがあり、「島嶼社会のグローバルなネットワークと連携協力に向けて」と題し、討議が行われた。

この日ははじめに、国際島嶼学会会長のグラント・マッコール氏が「生物多様性とシマンチュの暮らし」と題し基調講演。引き続きパネルディスカッションに移り、北マリアナ大学学長のアンソニー・デ・レオン・グエレロ氏、ミクロネシア大学学長のスペンシン・ジェイムス氏、グアム大学学長のハロルド・L・アレン氏、グアムコミュニティー大学学長のヒロミニアノ・デロス・サントス氏、東西文化センター沖縄プログラムディレクターのロバート・ナカソネ氏、南太平洋大学教授

のランディ・ターマン氏、石垣市史編集委員の石垣博孝氏、県立宮古農林高校教諭の前里和洋氏と伊志嶺市長の9氏がそれぞれの立場で発表を行った。琉球大学副学長の嘉数啓氏がコーディネーターを務めた。

このうち北マリアナ大学のグエロ氏は、同地域も観光を中心にした経済となっていることを説明し、「短期的な利益よりも、長期的に持続可能な利益でなければならない。観光開発計画において、観光資源の質を向上させ、社会そのものの向上につなげる必要がある」と持論を展開。地理的に離れていることによる輸送コストの問題やインフラの未整備などを指摘した。

南太平洋大学のターマン氏は「作物としての植物も重要だが、それ以上にさまざまな植物が基礎になっていることを忘れてはならない。自然環境があり、食糧があり、文化があり、互いに関係して発展につながる。また、島の発展性は海との関係性でもある。それなしに持続可能な発展はできない」と説いた。

宮古農林高校の前里氏は同校の地下水保全の取り組みを紹介し、「環境教育によって若い世代に自信と誇りを与えたい。若い世代が頑張ることが、持続的発展にとって重要」と述べた。

※ 写真 島嶼地域のネットワークづくりの必要性などを確認したシンポジウム＝2日、ホテルアトールエメラルド宮古島

2005年9月3日(土) 宮古毎日新聞  
島嶼会議プレ大会 「ネットワーク強化を」  
マッコール氏が基調講演

国境を越え、島嶼社会のネットワークを深めようと、世界島嶼会議プレ大会公開シンポジウム(主催・琉球大学、平良市、同実行委)が2日、平良市のホテルで開かれた。基調講演で国際島嶼学会会長のグラント・マッコール氏は「広い海に囲まれ、それぞれの島々が隔絶、離れているような地域において、非常に効果的な手段」とネットワークの重要性を強調。構築することが互いにとって有益だ、と説いた。(1面参照)

観光面についてマッコール氏は、宮古島から約1万5千キロ離れたチリのイースター島を比較。人口4千人程度のイースター島に、年間約4万人の観光客が訪れるなど、宮古島と同様に、観光業が島の重要な産業となっていることを紹介。

「宮古とイースター島は地理的に離れているが、互いに共通して島に住んでいる人たちの気持ちとして温かく迎えようという気持ちを持っている。ネットワークを築き、互いに協力すれば、イースター島は多くのことを宮古から学ぶことができると思う」と述べた。

また、マッコール氏は「それぞれの島に住民のはぐくんだ知識、知恵というものがあるが、それを互いに共有しない限り、本当の価値はない。ネットワークのもたらす有益さはそのほかの地域に住む人たちよりも大きい」と訴えた。

※写真 ネットワークの重要性を説くマッコール氏＝2日、平良市のホテルアトールエメラルド宮古島

琉球新報 9月6日(火)

## 世界島嶼会議沖縄プレ会議

世界島嶼会議沖縄プレ会議の那覇市と平良市で開かれた公開シンポジウムで、コーディネーターを務めた琉球大学の嘉数啓副学長に、会議の成果などを聞いた。

### 総括

“島”は発想の先端地域

—会議の成果は。

「専門家会議では、南太平洋の各大学との交流を今後いかに進めていくかについて話し合った。その中で、学生交流をさらに進めることが確認され、琉大にできた観光科学科にパラオやマーシャル、ミクロネシアから学生を送り込みたいという要望が出された。琉大では留学生支援も含め、受け入れ体制を整えていきたい。また、遠隔教育についても、教育ネットワークの改革につながる協力体制づくりに向けた取り組みが話し合われた。これはとても意義深い。さらにシンポジウムを通じ、“島”は発想の先端地域であることが確認できた。これは大きな成果だ」

—反省点は。

「会議の規模が拡大したこともあり、十分な準備ができなかった。大きな会議を持つときのサポート体制の問題は、今後かなり考えなくてはならない。開催時期についても、台風の心配をしなければならなかった。テーマを絞ったが、それに沿った議論ができたか、専門的なつっこみ方が足りなかったと感じた」

—2006年に米国ハワイ・マウイ島で開かれる本会議への展望を。

「今回の話し合いは、マウイにつながるものである、ということだ。出席者が持ち帰る知識は、多様な取り組みのアイデアになるはずだ。これが連続して循環することで、一緒に仕事をし、考えられるようになっていく。今はそのための過程にあり、われわれはそれを着実に歩んでいる。連携、協力をしてやって行かざるを得ないことも確認した。ネットワークをいかにしていくかが、大きなテーマになっていくと思う」

### 課題克服へ 島嶼地域 連携構築を

島嶼国のグローバルなネットワークの在り方と連携協力をテーマにした「世界島嶼会議沖縄プレ会議」(琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市、笹川太平洋島嶼国基金など共催)は、太平洋の8つの国と地域から大学の学長ら研究者が参加し、1、2の両日、琉大、琉球新報社、平良市の3会場で開かれた。琉大では専門家会議が、琉球新報社と平良市では、公開シンポジウムがそれぞれ開かれ、教育分野での連携強化や知識の共有の重要性、持続可能な発展に向けた努力を行うことなどを確認した。2日間の会議の詳しい内容を紹介する。

### パネリスト

グラント・マッコール氏 (国際島嶼学会会長)

トロイ・マクグレース氏 (マーシャルアイランド大学学長)

パトリック・トレイ氏 (パラオ・コミュニティー大学学長)

ブルース・ベスト氏 (グアム大学研究員)

ヘレン・J・D・ウィピー氏（グアム大学上級副学長）

ロバート・仲宗根氏（ハワイ東西センター・沖縄プログラムディレクター）

ランディ・ターマン氏（南太平洋大学教授）

コーディネーター

嘉数 啓氏（琉球大学副学長）

新報会場 シンポ「島嶼社会のグローバルなネットワークを連携協力に向けて」

「衛星」で遠隔学習 ベスト氏

日本が発展の手本 マクグレース氏

移民が沖縄、支援 仲宗根氏

環境保全に共通性 テレイ氏

大学間の提携大事 ターマン氏

太平洋全体で教育 ウィピー氏

学生交換進めたい マッコール氏

嘉数 啓氏

島の多くの場合、二つの相反する特質を持っている。一方で「海上の海」に象徴される外に開かれたオープンな社会経済。逆に「島ちやび（離島苦）」に象徴される隔絶された閉鎖的社会経済。この二つの特質が併存し葛藤してきたのが多くの島の特質であり解決すべき課題だ。島は文明の中心部から離れた「辺境」に位置するが、同時に新しい文明を生み出す「フロンティア」でもある。

今会議参加国のある太平洋地域は二十カ国・地域があり、そのうち十四カ国が国連に加盟している。日本との関係が深く、日本の常任国入りを支持している国々だ。

現在、政治形態はグアムなどは米国の準州であり、マーシャル諸島やミクロネシア連邦などは米国との自由連合となるなどさまざまだ。が、これらの島々は、出稼ぎ労働者からの送金や観光、基地収入に依存するという共通点もある。

パネリストの皆さんは各地域の状況と今後のネットワーク構築の課題を話してほしい。

ブルース・ベスト氏

グアム大学は笹川太平洋島嶼基金と協力して六年間、北マリアナ諸島、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国などを結んで遠隔学習を提供してきた。教育の拡充には人材も資金も不足していることが島嶼国の課題だった。

われわれは最初の二年で地域全体の計画を作り、三年目から衛星による通信実験、技術的アプローチを始めた。太陽光発電を利用したコンピューターの無線システムで、各村々で教育や通信ができるようにした。域内の島々が離れすぎているため常に衛星を利用したビデオや電子メール会議がなされている。さらに技術を進歩させ、グアム大学を通じて地方の学生に講義項目を提供し、域内の教育環境をいい状態にしたいと考える。

### トロイ・マクグレース氏

フロンティア的要素がありながら孤立している島嶼地域の課題を解決するのは日本が鍵となると考える。マーシャル諸島に限らず多くの島々にとって、日本の経験が孤立感の解消と経済発展の手本となるだろう。

マーシャル諸島は米国と密接な関係を持っているが、必ずしも米国と同じ考えではない。近隣島嶼国と同様、独立性と民主主義を重んじている。

島嶼地域はグローバル経済の中で、経済発展とともにいかに自然環境を保全するかという課題を背負っている。開発をほっておくと環境が破壊される。島嶼国は現代社会に追いつかないといけない上に自然環境に責任を持たなくてはならない。そのためにわれわれが学ぶことは米国ではなく日本にある。日本企業の成功実践や成果はわれわれの地域の最適モデルだ。

日本の団体からの資金援助も必要だが、技術・技能の提供や留学生の受け入れなどの面で日本のリーダーシップが求められている。援助より日本が戦後から今に至った経験を島嶼国に与えてほしい。

### ロバート・ナカソネ氏

グローバル化が進展する時代に人口の小さい島嶼が生き残るには、海外のネットワークは不可欠だ。私はウチナンチュとは、沖縄出身者で沖縄の伝統を背景に生活する人たちと定義している。ウチナンチュは二百万人以下の人口規模で、その32%、六十七万人が県外で暮らしている。こんな小さいグループが効果的なネットワークを構築できるか。

世界のウチナンチュネットワークは1900年のハワイ移民、その後の南米移民により始まった。多くの移民が貧困にあえぎながらも音楽や琉舞などでアイデンティティーを保ち、稼いだ金を本国に送金し続けた。第二次世界大戦で灰じんに帰した故郷に対し、ハワイのウチナンチュ社会は衣類や食料、豚やヤギまで送って沖縄を支援した。この支援プロジェクトがハワイ沖縄協会結成のきっかけとなった。80年代、沖縄の政治経済の尽力や琉球新報社の連載「世界のウチナンチュ」もあり、沖縄と海外ウチナンチュのネットワークが強化された。90年にハワイ沖縄文化センターが沖縄側の支援を得て建設され、97年には沖縄県系人のビジネス組織であるWUB（ワールドワイド・ウチナンチュ・ビジネス・アソシエーション）ができ、毎年会議を持っている。中国やインドはネットワーク構築に数百年の歴史を持っている。ウチナンチュの試みは始まったばかりだ。

### パトリック・トレイ氏

パラオには沖縄や日本と深い関係がある。私たちの言葉には日本語がそのまま使われているものが多い。言葉や名前が同じであることで、協力体制を結びやすくなる。ぜひ連携を深めたい。

パラオ・コミュニティー大学は1927年、日本がパラオを統治していた時代に設立された。2007年には80周年を迎える。私たちの事務所は、南洋庁時代の病院であった場所に位置しており、2年大学のコースがある。

太平洋地域のネットワークの中で共通して重要な課題は海洋生物がすむ環境だと思う。このことは、引き続き琉大と追求していきたい。今後も、海にすむ生物や環境保全に関する課題を取り上げていきたい。

私が次に沖縄に来る時には、パラオの学生を連れていきたい。パラオコミュニティー大学は立命



館大学、早稲田大学と提携を結んでおり、(両大学から) 15 人の学生がパラオで学んでいる。将来、ぜひ琉大の学生も来てほしい。学生の交流は重要だ。

皆さんが毎日見ている海はパラオにもつながっている。その光景がパラオでも見られる。その事実だけでも協力体制を結ぶきっかけとなる。

#### ランディ・ターマン氏

沖縄とは島嶼国としてさまざまな共通点があり、私たちの問題と皆さんの問題は似ている。太平洋地域全体の問題解決を考えることで、質の高い研究が深まることを強調したい。

南太平洋大学は、フィジー、キリバス共和国など 12 カ国、地域にわたって存在しているためキャンパスは島々に散らばっている。新しく加わったのが、マーシャル大学。

緊密な関係にある日本からは、学ぶことが多く、連携していくことが欠かせない。南太平洋大学は、4 つの学部にも再編された。その中には、島嶼国ならではの海洋部がある。他大学などと連携しながら持続可能な開発を見つけるため、研究を深めていきたい。

遠隔教育として、合計 17 ヶ所で南太平洋大学が提供する通信教育があり、大学院レベルでの認定も行われる。各地に海洋センター、大規模な図書館などの施設がある。エコツーリズムやコミュニケーションなどについて地域の研究を進めていきたい。

今、世界的な教育ネットワークの中での各大学の連携が大事になってきている。

#### ヘレン・ウィピー氏

島国である太平洋地域の人々は、信頼関係のネットワークを緊密にすることが重要。グアム大学は個性的な教育の考え方を持っている。地域全体で教育の目標を持ち、他大学との単位互換、編入生を確立することも目指したい。私たちは、太平洋地域全体の人々に教育を受ける機会を与えようとして取り組んでいる。

#### グラント・マッコール氏

ここまでのまとめとしていくつか感じたことを指摘したい。

まず、私たちは面積が小さい島国に住んでいる。しかし、小さいことが大きな結果を残すための障害にはならない。

また、島国では、ネットワークが重要であることや、海は私たちを隔てるものではなく、結びつけるものであることを再確認できた。今回の会議が、教育面では遠隔学習などの成果につながることを期待する。

私たちの将来は若い人たちに懸かっている。若い人たちのために、(大学同士の) 交換学生の促進を目指したい。

今日のように新しいことを知ったならば、蓄えてきた知恵を共有し、私たち一人一人がこれからも情熱を持って取り組んでいくことが大事だ。

※写真 島嶼社会のグローバルなネットワークと連携協力に向け課題などが挙げられた公開シンポジウム=1 日午後、那覇市天久の琉球新報社

## 生態系守る努力必要

平良会場 シンポ「生物多様性とシマンシュの暮らし」

平良市で開催された公開シンポジウムでは、「生物多様性とシマンチュの暮らし」をテーマにパネルディスカッションが行われ、9人のパネリストが島嶼地域の現状などを報告した。

グアム大学学長のハロルド・L・アレン氏は「島の生態系は変化に弱いという一面を持っている。生態系を守るためには努力が必要」と指摘。また「島々の社会生活を守るには、島同士で情報を共有することが必要だと思う」と述べ、大学同士のネットワーク構築など地域間での協力体制の必要性を強調した。

北マリアナ大学学長のアンソニー・デ・レオン・グエレロ氏は「経済効果だけが観光の目標ではないことを島々の政府機関者に理解させないといけない」とし、「経済効果は重要だが、それは持続可能で長期的なものであることが必要。観光客に満足いくサービスを提供するため官民が協力して情報を共有し、長期的な観点から計画を進めるべきだ」と主張した。

石垣市史編集委員の石垣博孝氏は、八重山地方に古くから伝わる「マルマブンサン節」などの歌詞に当時の生活や動植物などが練り込まれていることを紹介し、「最近では自然の動植物に触れる機会が減り、このような自然を題材にした歌が民衆から生まれてくることはないだろう。島の自然を大切にすべきだ」と提言した。

また、ミクロネシア大学のスペンシン・ジェイムス氏は「島嶼地域は互いの関係性なく存在できない。地球規模でのネットワークや協力が必要だ」と訴えた。

グアムコミュニティー大学学長のヒロミニアノ・デロス・サントス氏は「島というものは、一つであるという共通性を感じることができるのはプラス面だが、島の自然環境から見ると、ある種の生き物が存続の危機にあるとそれを餌にする種も危機にひんするなど、マイナス面もある」と分析した。

そのほか、南太平洋大学教授のランディー・ターマン氏や県立宮古農林高校教諭の前里和洋氏らも発言。パネリストらの報告や提言を受け、平良市長の伊志嶺亮氏は「島嶼地域には多くの共通課題があることが認識でき、ネットワーク構築の必要性を感じた」と述べた。

## 基調講演

### 知識、知恵の共有を

グラント・マッコール氏（国際島嶼学会会長）

シマンチュ（島の人）は、お互いのコミュニケーションや通信により、ネットワークをつくってきた。しかし、大陸に住む人たちは、島というものを分離したものだと考えている。いくつかの地域、あるいは国々に分かれている今日の状況は、非常に不思議なものになっていると思う。

実際に島に住んでいる人々の頭には、いくつかの地域に分かれているという感覚がない。最初に島にたどり着いた人たちには、隔たりや分かれ目の意識なく、人々は互いにコミュニケーションをとりながら、ネットワークをつくる中で、島が作り上げられていった。

宮古とラパヌイ（イースター島）を比較してみよう。地理的には一万四千キロ離れているが、共通のものをもっている。例えば観光だ。島に住んでいる人たちの気持ちとして、観光客を温かく迎

えようという気持ちは共通している。だから、協力やネットワークづくりができるとすれば、将来宮古からラパヌイは、多くのことを学べる。

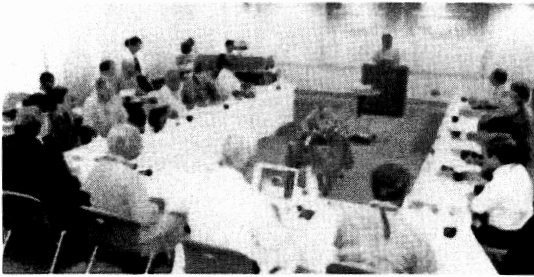
インターネットは、広い海に囲まれて隔離されたような地域において、(知識や情報を共有する)一つの方法だ。島に住む人々にとって、インターネットの有益さは、ほかの地域の人たち以上のものだ。

ここでぜひ皆さんにニソロジー(島嶼学)という言葉、一人一人の概念として考えてほしいと提案する。ニソロジーはネットワークであり、皆さんとの協力体制というものを通して発展していく。沖縄で生まれた言葉で、金門島で確立され、きょうにつながっている。われわれは知識、知恵があるが共有しなければ意味がない。それを強調して講演を終えたい。

## 連携強化へ討議 世界島嶼プレ会議が開幕 琉大

掲載日時 2005-9-1 15:25:00 | トピック：社会

島嶼（とうしょ）国の研究者が、島々の世界的な連携強化に向けてさまざまな視点から論議する「世界島嶼会議沖縄プレ会議」（琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市など共催）が1日午前、西原町の琉球大学50周年記念館での専門家会議を皮切りに始まった。島嶼各国の大学の学長ら20人の研究者が出席し、島々の連携に向けた問題点と方策を探った。



島々の連携強化について話し合う出席者ら＝1日午前9時15分ごろ、西原町の琉球大学50周年記念館

専門家会議では、琉大の森田孟進学長が「島嶼が抱える共通問題は、互恵的パートナーシップで継続的な取り組みを行う必要がある。シンポジウムの中で、島嶼コミュニティに便益をもたらすような結果が生み出されるよう期待したい」とあいさつ。嘉数啓琉大副学長が、琉大の成り立ちや沖縄と島嶼地域の交流について説明した。

琉大COE（卓越した研究拠点）リーダーの土屋誠理学部教授が、琉大が取り組むCOEプログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析—アジア太平洋地域における研究教育拠点形成」の概要などを説明。慶応大政策・メディア研究科の鶴野公郎教授は「持続可能な開発のための環境教育」と題して報告した。

午後2時からは、那覇市天久の琉球新報社で「島嶼社会のグローバルなネットワークと連携協力に向けて—島はインターナショナル」と題した公開シンポジウムが開かれる。

沖縄プレ会議は、2006年7月29日から8月3日に米国ハワイのマウイ島で開かれる「第9回世界島嶼会議」に向けて開かれた。2日から平良市に会場を移し、生物多様性に恵まれた島嶼環境の維持と発展を同時並行的に進めるための方法などについて話し合う。

## 連携の重要性確認 世界島嶼プレ会議公開シンポ

掲載日時 2005-9-2 9:29:00 | トピック：社会

「島嶼（とうしょ）社会のグローバルなネットワークと連携協力に向けて—島はインターナショナル」と題した世界島嶼会議沖縄プレ会議（琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市など共催）の公開シンポジウムが1日、那覇市天久の琉球新報本社で開かれた。パラオやマーシャルアイランドなど島嶼国の大学の学長ら7人のパネリストが、経済的、地理的な共通課題や、各大学・地域での取り組みなどを報告。互いの連携と、ネットワークの重要性を確認した。



島嶼国の課題や取り組みなどについての報告が行われた「世界島嶼会議沖縄プレ会議」の公開シンポジウム＝1日、那覇市天久の琉球新報本社

国際島嶼学会のグラント・マッコール会長は「将来を担う若い人たちのために、われわれの果たす役割は交換学生を行うことだ」と話し、今回のシンポジウムと2日に平良市で開かれるシンポジウムの成果として、遠隔学習や交換留学生の促進につなげたい考えを示した。

パネリストは、マッコール会長のほか、グアム大のブルース・ベスト研究員、マーシャルアイランド大のトロイ・マクグレース学長、ハワイ東西センターのロバート・仲宗根氏、パラオコミュニティ大のパトリック・テレイ学長、南太平洋大学のランディー・ターマン教授、グアム大のヘレン・J・D・ウィピー上級副学長の7人。コーディネーターは嘉数啓琉大副学長が務めた。

会場には約130人が集まり、3時間半にわたる発表に耳を傾けた。

## 平良市で公開シンポ 世界島嶼沖縄会議

掲載日時 2005-9-3 10:36:00 | トピック：社会

【平良】太平洋の8つの国と地域から、大学の学長など島嶼（とうしょ）学研究者らが参加して開かれた「世界島嶼会議沖縄プレ会議」（琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター主催、琉球新報社、平良市、笹川太平洋島嶼国基金など共催）は2日、平良市で公開シンポジウムを開催。インターネットなど最新の技術を使い、伝統的な知識の共有を目指すことや、持続可能な生活の質の向上に向け努力することの重要性などを確認し、2日間の会議を閉幕した。



世界島嶼学会のグラント・マッコール会長の基調講演に聞き入る平良市民ら＝2日、平良市のホテル・アトールエメラルド宮古島

基調講演した国際島嶼学会のグラント・マッコール会長は「島嶼学はネットワークで成り立ち、みなさんとの協力体制を通して発展する。われわれが持つ知識、知恵は共有しなければ意味がない」と話し、連携の重要性を繰り返し訴えた。

「生物多様性とシマンチュの暮らし」をテーマに行われたパネルディスカッションでは、北マリアナ大のアンソニー・デ・レオン・グエレロ学長、ミクロネシア大のスペンシン・ジェイムス学長、グアム大のハロルド・L・アレン学長、グアムコミュニティー大のヒロミアノ・デロス・サントス学長ら6人が、島嶼地域が置かれている現状を報告。

宮古農林高校の前里和洋教諭は、2004年に「ストックホルム青少年水大賞」を受賞した同校の取り組みを紹介したほか、石垣市史編集委員の石垣博孝氏は「謡に見る生物と島人の暮らし」と題して報告した。コーディネーターは嘉数啓琉大副学長が務めた。